

俳諧詩

八塚一青

前稿で「詩」と「俳句」について触れました。俳句も詩の一種とされていますので、「詩」という大きな括りの中の、非常にユニークな存在として「俳句」があると言えます。海外では「詩」を詠む人は皆「詩人」ですが、日本では歌人から始まり、俳人、そして詩人と呼び方さえも異なります。面白いことに川柳を詠む人は「川柳作家」と呼ばれます。あえて作家と呼ばれてきたということが意味するところは何でしょう。川柳がいわばコントや漫才に近いものと捉えられてきたからかもしれません。川柳を貶めるつもりはありません。むしろ好きです。憧れです。あれだけ自由に笑いを作り出すのですから。ですが、自分は滑稽俳人でありたいと願います。俳人というのは俳味を常に持ち続ける生き方そのものを言い表しているのではないか。その誇り、矜持を持って句作に臨まなければならないと思っています。

昭和初期に、「詩」に憧れた俳人がいました。高浜虚子です。昭和十三年に息子の高浜年尾を発行人として雑誌『俳諧』が創刊されました。その中で「俳諧詩」というコーナーが作られます。それは「俳人の試みる詩」というもので、虚子の娘である星野立子も寄稿しています。

卓の上の

散りぬし梅に面よせて

かるく花びら

吹きみれば

花びらは皆吹き落ちて

卓の上には蕾ばかり

もともと星野立子は父よりも明るい句を詠む人ですが、この俳諧詩にも立子らしい味があります。軽い気持ちでかわいい花に息を吹きかけたところ、花びらが

全部落ちてしまって、ああ、ごめんなさい、そんなつもりでは…。という小さな後悔が伝わります。立子の俳諧詩には可能性を感じますが、提唱した虚子自身の俳諧詩は肩に力が入ってしまったのか冗長で作家的なものが多く、結局、俳句の方がいい。俳句でいいではないかと思ったのか、戦争の影響もあり、昭和十九年の『俳諧』終刊と共に俳諧詩は終わります。

それから七十五年が経ちました。私はこの「俳諧詩」を現代へ復活できないものかと考えています。この形であれば世界の人たちが言語の障壁なく、「俳味」を愉しむことができるのではないか。そう真面目に考えています。そうすれば世界は今よりちょっと明るくなるのではないか。何でもない毎日が今よりちょっと楽しくなるのではないか。私の夢です。

三回に亘って思うところを書き連ねてしまいましたが、これらは句作には余計なことです。頭で句を作るのではない。作家ではないのです。笑わせてやろうとして笑わせるより、笑わずつもりはなかったのに笑ってくれる方が至上（詩情）の笑いだと思います。あと最後に思うこと。ローマの詩人が言ったように「健全な精神は健全な肉体に宿る」。元気であることが何より大切。よく笑えば長生きできると言います。明るい方を向いて太陽の光をいっぱい浴びながら、俳味を味わい尽くして生きて参りましょう。

完